2019. 6.1 GEWANDHAUS 龍ヶ崎ゲヴァントハウス【オリジナルCDコンサート】

生誕150年“ルーセルとプフィッツナー”
ー伝統と革新の間でー　同世代のラヴェルの名曲を合わせて

プログラム

今年はフランスの作曲家**ルーセル**とのロシア生まれのドイツの作曲家**プフィッツナー**の生誕150年に当たります。今日はこのふたりの作曲家と同世代の作曲家**ラヴェル**のボレロを合わせて聴いていただきます。
プフィッツナーは音楽家の父から音楽を学び、フランクフルトのホッホ音楽院で作曲を学んだのち、1908年から1918年までシュトラスブルグ市の音楽監督と音学院院長を努めました。プフィッツナーの音楽様式はドイツ・ロマン派を基盤としながらも、これを個性的に変貌させた独特の性格をもっています。歌劇「パレストリーナ」は彼の代表作のひとつで、3つの前奏曲は単独でもしばしば演奏されています。小交響曲は1939年に作曲、その年にフルトヴェングラー指揮ベルリン・フィルによって初演された作品で、ロマンの香りと小気味良い楽想を持った佳曲です。ヴァイオリン協奏曲はこの作曲家の特徴を最もよく表した作品で、ロマンティックな響きと近代的な響きが交錯する独特のスタイルを持っています。この時代のヴァイオリン協奏曲を代表する名曲です。ルーセルははじめ海軍兵学校を出て士官となりますが、健康上の理由から軍職を去り、幼い頃から親しんで来た音楽の道に進みます。25歳の時パリに出てジグーに作曲法を学び、その後スコラ・カントルムに入学、優れた対位法の技術を身に付けたルーセルは対位法の教室を任せられ、12年間在職します。創作は3つの時代に分けられ、印象主義的な傾向が強く、ダンディやフランクの影響が認められる第1期、絶対音楽に近づこうとした第2期、独自の作風を確立した第3期に区別されます。三重奏曲は1929年の作品で、自然な広がりと柔軟な技法を駆使した佳曲です。ルーセルは生涯4曲の交響曲を残しましたが、1930年ボストン交響楽団創立50周年のために作曲された第3番は、彼の代表作のひとつで、交響曲の伝統を受け継ぎながら、無駄な音をいっさい排し、フランスのエスプリを持ちながら強い推進力で支配された傑作です。最後はラヴェルのボレロ。名指揮者マルティノンの貴重なライヴです。

＊＊＊＊＊＊＊

ハンス・プフィッツナー（1869～1949）：
歌劇「パレストリーナ」から第1幕の前奏曲

エーリッヒ・ラインスドルフ指揮バイエルン放送交響楽団
（1992.7.9　ミュンヘン、ガスタイクホールでのLive）

小交響曲ト長調op.44～第1、第3、第4楽章

ヘッス・ロペス=コボス指揮ローザンヌ室内管弦楽団
（1997.10.7 ローザンヌ、メトロポールでのLive）

ヴァイオリン協奏曲ロ短調op.34～第1楽章、第3楽章

エディット・パイネマン（ヴァイオリン）
ルドルフ・ケンペ指揮スイス音楽祭管弦楽団
（1973.8.15 ルツエルン、クンストハウスでのLive）

＊＊＊ 休 憩 ＊＊＊

アルベール・ルーセル（1869～1937）：
フルート、ヴィオラ、チェロのための三重奏曲op.40

カール・ハインツ・ツエラー(フルート)／ライナー・モーク(ヴィオラ)
ヴォルフガング・ベッチャー(チェロ)
（1975.9.20　ベルリン、フィルハーモニーホールでのLive）

交響曲第3番ト短調op.42

ミシエル・プラッソン指揮スイス・ロマンド管弦楽団
（2001.1.30 ジュネーヴ、ヴィクトリアホールでのLive）

モーリス・ラヴェル（1875～1937）：
ボレロ

ジャン・マルティノン指揮フランス国立放送管弦楽団
（1973.4.25 ロンドン、ロイヤル・アルバートホールでのLive）

★ホームページアドレス　http://gewandhaus.sakura.ne.jp/wp/